

お湯のある風景

お風呂と、お湯の
ある暮らしを解く

第2回

人々の欲望と宗教・ 思想に揺れ動いた 世界のお風呂の歴史

(その1)

お風呂の痕跡

人類は、その歴史のなかでさまざまな文明を経て現在に至ったが、世界の多様な暮らしから、お風呂にもさまざまな価値や方法があったと思われる。その起源はどこにあるのか。数多くの研究者にとって魅力あるテーマであるが、現在に至ってもほとんど分かっていない。おそらく中央アジアのどこかであろうといわれる。

世界中に同じようなお風呂の痕跡があり、気の遠くなるような時間をかけて伝わったものと考えられるなら、東西文化交流の地域だったからというあいまいな理由が付けられているのである。

人類におけるお風呂の発展は、大方次のよ

うなプロセスを経たものであると考えられる。

人類の生存に深く関わる水がある環境で、宗教に深く根差して広がった沐浴。水とともに人類生存に必要な火の取り扱いから生じた熱気浴や蒸気浴。

人類が進化する過程で、何らかの方法でお湯を得て身体に触れ、身体を洗うなどに至ったのではないかと考える。温泉が絡んでいたとも思われるが、お湯を得て利用することは、お湯を沸かす、お湯を溜める容器や材料があつて成立する。そこには何らかの痕跡が残されたので、生活や価値をある程度推測できる。

こうした痕跡を持った文明も数多く確認され、お風呂が人類にとって意味があつたと思わせるのだ。

古代ミノア文明における 高度な給排水設備

建物に浴室等を作って入浴したとされるのは紀元前2000年とも3000年ともいわれる。歴史的にはつきりしている古い浴槽は、紀元前2000年頃のシリアのマリにある宮殿のものと見られる。インダス河流域モヘンジョ・ダロにおいて紀元前2500年から紀元前1500年頃まで栄えた古代都市で多くの家にシャワー付き浴室があつたのが確認されている。ここでは石積み下水道も完備していた。

ヨーロッパ文明発祥地とされるクレタ島は、紀元前20世紀から前15世紀頃にミノア文明が栄え高度な給排水設備技術があつた。紀元前1700年頃の浴槽がクレタ島で出土している。幅47cm、長さ117cm、深さ50cmほどのコンバクトなもので、今の日本の浴槽と比べると幅が少し狭い。材質はテラコッタ製で、現代でも通用しそうな意匠が施されていた。クノッソス宮殿には、テラコッタ製の配管をつなぎ合わせ水を送る良く考えられた技術があつた^{※1}。宮殿の区画ごとに独立した排水設備があり人が通れるほどの大きな本下水道で受ける仕組みであつた。

今から4000年も前にすでに上下水道の優れた技術があつた。それを何百年間も継続使用する社会の仕組みがあり、その文明の痕跡を現代にまで残してきた。王宮など一部利用に限られていたとしても古代に果たしていた役割は重く受け止められる^{※2}。

※1 この時代に、配管の接合部にはコンクリートが用いられていたとされる。
※2 『風呂トイレ賛歌』ローレンス・ライト、晶文社、1989年、ほか参照。

ローマの浴場は 帝国の力の象徴

ギリシャ時代になると、入浴習慣は人々の生活のなかに組み込まれ、浴室や浴場施設が整備された。水を使った沐浴から温浴が一般化したのもこの時代。しかし、ギリシャ時代の前半は婦人子供の入浴は禁じられ、個人が浴場を得るにはいろいろな制限があり、入浴習慣は広まらなかった。

その後期になって全ての都市に作られた競技場に付属する形で浴場は設置され、水浴場、温浴場、蒸風呂、採暖室等が整った。しかし、ギリシャ人は、あくまで汗を流すという肉体の鍛錬、運動が主体で、入浴はその付属要素が強かった。

ローマに初めてお風呂ができたのは、紀元前6世紀頃といわれる。その後、アッピア水道^{※3}が完成(紀元前312年)し、公設・私設浴場が増え、入浴習慣も広まった。浴場形態は、ギリシャと同様で運動後冷たい水をさっと浴び気分爽快になるのが当初の目的であった。

紀元前217年、ギリシャ医師アルハガトスが温水浴を広めてから温浴が盛んとなり、紀元前2世紀末頃には多人数で同時入浴できる社交的な共同浴場が登場した。紀元前89年、セルギウス・オーラータが発明したとき

れる薪や炭火から燃焼ガスを中空の床下や壁の中を通す暖房(ハイポコースト)方式を公衆浴場に用いるようになった。

こうした公設浴場は、ローマ帝政時代(紀元前31(西暦395年)に最盛期を迎える。ネロをはじめ皇帝たちはその権力を誇るため、競って壮大で豪華な大浴場を作った。なかでもカラカラ帝の大浴場が有名だ。

丸天井の部屋が66室、その他の部屋やホールも整えられ、道に沿って店が並んだ。冷浴室、微温浴室、温浴室、蒸風呂(発汗室)、化粧室、娯楽室、食堂、図書館、博物館、体育場等の部屋があり、82の部屋には湯水が供給され床下からの暖房設備も完備された。それは400m四方の土地に建てられ、一度に1600名が入浴できた。ローマ市民は、脱衣室から冷温室に入り、広い建物の前の大きな水泳プールを利用できた。温浴室の出口左右にホールがあって飲食もでき、遊歩室を歩き外気に涼むこともできた。

市民は午前中の労働や軽食・午睡を終え、午後の夕食までの間、つまり長い空白の時間を積極的に入浴に活用したとされる。その入浴時間は午後1時から夕暮れまでが普通で、市民はゆっくりと時間をかけ順次移動する入浴を習慣とし娯楽、社交の場として大いに楽しんだ^{※4}。



古代ローマの浴場 (イメージ/Gemini作成)

ローマ時代、軍隊の行くところはどこにも公共浴場が作られ、温泉が発見されるとそこを兵士用浴場とするなどにより、ヨーロッパ、アジア、アフリカにローマ式浴場は広まった^{※5}。

400年以上に渡り、ローマ帝国は独自の温泉文化を持ち続けた。

壮大な規模の施設を維持発展させたローマの意思はどこにあったのか。日本と同様、ローマには温泉が沸き出る環境があつて、そ

の影響を強く受けたとされるが、ローマ市民は世界でも類を見ないお風呂好きだったようだ。

巨大な浴場の仕掛けは、人類のお風呂の歴史過程（沐浴から始まって熱気浴、蒸気浴、そしてお湯に浸かる）の全てが詰まっていた。

やがてローマ帝国は滅び、歴史の舞台から消えていったが、公衆浴場もまた消え去る運命にあった。円熟のローマ帝国時代から浴場は売春・飲酒・賭博等の歓楽の場、罪悪の温床と化していた^{※6}こともあり、社会から厳しい目が向けられ、厳格禁欲主義のキリスト教では入浴に対し否定的な思想が広がっていかからである。

※3 当時、木、鉛、石の配管が多く使われ、銅は水栓や弁などに使われた。紀元前312年から3世紀にかけて建築されたローマ水道は、最も偉大な古代土木建築の一つ。現代でも多くの都市で用いられている。

※4 ローマのお風呂は、社会的地位を問わず全ての人が利用できた。しかし、富裕層の自己顕示の場所でもあり、競って一日に何度もお風呂に入り、豪華なものにしたとされる。日本の温泉、銭湯のようになりラックスできる空間ではなく喧騒と喧嘩の中で我慢を強いられる環境であったようだ。『風呂の文化誌』山内昶・山内彰、文化科学高等研究院出版局、2011年。

※5 ローマ帝国の建造物は、英国奥地にも見られ、その帝国の影響を感じることができる。

※6 ローマの風呂は、ただの浴場というよりあらゆる種類の快楽を伴った娯楽施設だった。

ローマから イスラムの入浴文化へ

ローマ帝国崩壊後、西ローマ帝国内では浴場文化は廃れたが、東ローマ帝国内では浴場

が小規模な形で存続した。

イスラム勢力が東ローマを支配下に置き、ローマの入浴文化は、イスラム世界のなかで、類似性を維持しながら独自のものとして昇華した。イスラムの浴場建築は、熱を効果的に利用できるよう半地下に造営されることが多かった。街路から直接は見通せない通路の奥に入り口があった。噴水盤とベンチを備えた脱衣室ないしは談話室・休憩室、そしてトイレを経て浴室本体が3つ並んで置かれていた。

第一室は余熱で暖かくなる部屋(冬季に脱衣室となる)、第二室が中間室(温浴室)、そして第三室が熱浴室(蒸気風呂)で、ここには個室や浴槽、腰掛台、湯と水の蛇口などが備わっていた。熱浴室の奥に窯焚きがあり家畜の糞や薪等燃料をくべる炉が設けられた。

時代や地域によって第一室および中間室がさらに省略される場合もあった。浴場の床は大理石など熱をよく伝え、防水性に優れた素材が好まれた。ただし、ローマ帝国時代のハイポコーストは簡略化され、直線的な煙道に変化した。

浴室は円屋根で覆われ、そこに明り取りの穴が開けられ、青・緑・黄などの色彩豊かなガラスがはめ込まれた。浴場の壁にはさまざまな絵画装飾が施された。入浴は、入口から脱衣室、浴室に入りゆつくり体温を高め発

汗を促し、時に浴槽に浸かり、それから身体を徐々に冷ましていく。浴室には洗髪、垢すり、マッサージ等の世話をする従事者が控えていた。各浴室を一巡した後、脱衣室に戻りゆつたりとした東洋的な静けさに包まれた時間を過ごした。

古代ローマの浴場に似て、入浴に身分や地位の区別、貧富の差による制限はなかった。特別料金を払えば、それに応じた待遇を受けられた。男女の別はあったが、浴場は女性に開かれたほとんど唯一の社交と寛ぎの場でもあった。

簡素化されたイスラムの入浴文化は、オスマントルコ帝国の下で隆盛を極め、その後も長く続いていくことになる^{※7}。

※7 イスラムの入浴文化は、3〜6世紀にかけシリアの公衆浴場から発想し、8世紀に確立したとされ、浴場から体育及び知育の場としての性格を排し、蘇生行為そのものに宗教的性格を与えた。イスラムの公衆浴場はハマームと呼ばれモスク(回教寺院)の役割を補うものとされた。これを建立し寄進することは敬虔な行為とされた。ハマームは、ローマ帝国と同様に、モハメッド教徒の影響が及んだあらゆる都市、地域に発達した。バルカン半島、ペルシャ、小アジア、エジプトからモロッコにかけてのアフリカなどでもみられる。



村田 幸隆
むらた・ゆきたか
一般財団法人ベターリビング
アドバイザー
1973年東京ガス株式会社入社
住宅性能および住宅設備、部品の開発、評価業務を担当。また、住宅産業に関わる諸団体事業に幅広く関与。2012年住宅保証機構株式会社監査役、同一般財団法人ベターリビングサステナブル居住研究センター副センター長、2019年より現職。